



巻頭言

されどわれらが日々——

●
大峯 巖 Iwao OHMINE

自然科学研究機構 分子科学研究所 所長



文庫本「されどわれらが日々——」の表紙にはみすぼらしい汚い大学の廊下が映っている。この昔の小説のタイトルが我々の青春の真っ只中にあった変動の時代、豊かではなかったが、春の芽吹きのような胎動感と、白紙の上に一字を描いていくようなひたむきさがあり、学問の世界にも大きな鼓動をつくりだしていた。それからほぼ50年たった今、日本は大きく異なった様相を示している。閉塞感と不安感が社会を覆っており、それまでの制度に対する不信感が何らかの改革を求めている。確かに現在の日本の高等教育、特に大学院レベルの教育に関しては、我々の従来の考え方を基本的に変えることが迫られていると思う。学生にどんな困難も乗り越え生きるための慥かな「知的な体力」をつけることが我々のミッション（義務）である。

社会が我々に真に求めているものは、常にオリジナリティーを生みだしていく力の構築ではないだろうか。湧き出でる渾々とした流れがなければ、いかなる大きな湖であっても干上がってしまう。「自分はメジャーになったことはなく、常にマイナーであった」——私の恩師である Martin Karplus (以下、敬称略) の言葉である。新しい科学の方向を切り開き、渾々たる科学の流れを作った研究者の心の声であると思う。彼は30代の半ばから、若いときからの憧れであった生命の源を新たな理論化学の礎で見直すという試みを始めた。それは誰も辿ったことのない道を一人ひたすら歩いていく過程であった。私の出会った優れた研究者はすべて、限らない誠実さとノーブルな孤独さをもつ人たちであった。

若い研究者を育て、新たな科学の芽を生みだすのに必要なものは、立派な設備でも、大きな資金でもない。それは、福井、白川、野依、田中、下村のノーベル化学賞につながるような研究が、あの決して豊かではない時代に生まれたことが示しているように思う。そして、例えば、名古屋大学では物理に坂田、早川、化学には平田という大きなリーダーたちがおり、新たに学問を始めようとする若者を慈しみ、同時に学問をすることの厳しさを身をもって教えていた。

今日、多くの大学で英語化、グローバルイゼーションが叫ばれている。言葉は大切であるが、それは十全なものではない。幾人かの非英語圏の著名な研究者が英語で講義するのを聞いたが、その多くは「稚拙」とも例えられるような英語であった。しかし、学生は言葉の後ろにあるその人の持つ学問を必死に学ぼうとしていた。グローバルイゼーションとは、それぞれの国、それぞれ人の持つ真髄を、互いに理解し体験することである。そのためには、自己の中に「芯」を持つことが最も大切である。目に見えない、言葉に表し得ない「芯となるもの」をいかに観、掴むか、その厳しさを先輩方は我々に面授してきた。

「我々の存在の原点」となる本来の学問が生まれる素地を耕し続けることこそが、これからも続く長い歴史の中での我々の役割であろう。

© 2015 The Chemical Society of Japan